

と例(3)に関しては태어나다 [taeconada] は対応せず、代わりに関連語(탄생하다 [tansaenghada]: 誕生する、나오다 [naoda]: 出てくる、생기다 [saenggida]: 生じる)が対応する。このように、日本語の「生まれる」は意味拡張がかなり進んでいる多義語であるのに対して、韓国語の태어나다 [taeconada] は、意味拡張がほとんど進んでおらず、基本的な意味用法にとどまっていると考えられる。

以上を踏まえて、本稿では、日本語の「生まれる」が持つ複数の意味を記述し、それぞれの複数の意味が韓国語とどのような対応関係にあるかを明らかにすることによって、韓国語教育及び日本語教育における効果的な学習指導法の可能性を探る。

具体的な考察に入る前に、次節では、多義語の基本的な性質や位置付け、分析方法などについて先行研究を踏まえて概観する。また、「生まれる」の多義性を明らかにする前提として、多義語分析の課題とその解決のために援用する概念について、先行研究に基づき簡略に説明する。

2. 多義語の分析について

2.1. 多義語の位置付け

国広(1982:97)は、多義語(polysemic word)を「同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う」と、また、「同音異義語」を「同一の音形に、意味的に関連を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである」と定義している。ただし、「多義語」と「同音異義語」を区別する「意味的な関連の有無」という基準は決して明確なものではなく、「同音異義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとするのがそもそも無理なことである」と考えるべきである(p. 108)

と述べている。つまり、国広（1982）は同音異義語、多義語、単義語（単一の意義素の文脈的変容）のそれぞれの境界を明確にすることは困難であり、連続的であるという立場を取っている。この連続性⁽¹⁾と関連することとして、朧山（2021）では意味と漢字表記の関係は、「同音異義語（例：くも（雲・蜘蛛）」「多義的別義と漢字表記が対応（例：さめる（冷める・覚める・褪める）」「ゆれ（例：カタイ（固い・硬い・堅い）」の3通りの場合が考えられると指摘している。ところで、「うまれる」には、「生」「産」という2種類の漢字表記があるが、「生まれたて／産まれたての赤ちゃん」のように「うまれる」の意味の違い（多義的別義）に厳密に対応しているとは言えない場合と、「記録が生まれる／？産まれる」のように、多義的別義と漢字表記が対応する場合がありますと考えられる。以上を踏まえて、本稿では漢字表記の相違に依拠する区分は行わず、あくまでも意味の相違にのみ注目するという立場で、分析を行う。

以下では、多義語の定義や位置付けなどについて、基本的に上記の立場に立って考察を進めていく。

2.2. 多義語分析の課題

多義語の意味分析をめぐることは、従来から様々な分析方法が提案されているが、日本語の例を中心に詳細な記述・検討がなされているものとして朧山の一連の研究があげられる。朧山（2001, 2002, 2019, 2020, 2021）は、多義語の分析において明らかにしなければならないこと、即ち、多義語分析の課題として、少なくとも以下の1)～4)が考えられると述べている。

- 1) 何らかの程度の自立性を有する複数の意味（多義的別義）の認定
- 2) プロトタイプの意味の認定
- 3) 複数の意味の相互関係の明示
- 4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

本稿では、上記の課題のうち、主に3)と4)の課題について詳しく検討する。

まず、3)の課題について、舩山 (2001:33) は「多義語の実際の分析を通して、複数の意味の間には一般にどのような種類の関連が認められるかということを明らかにすることも重要な課題である」とし、「メタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喩が、複数の意味の関連付けに重要な役割を果たすと考える」と述べている。以上を踏まえて、多義語の複数の意味の関連性を比喩の観点から考察する。なお、3種の比喩の定義・性質・種類をめぐっては諸説あるが、ここでは、舩山・深田 (2003:76-87)、舩山 (2010:35-52, 2020:97-124) の記述を参考にする。

メタファー (隠喩)：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

「パンの耳」：パンの端のほうの部分→器官としての「耳」

「息子にお荷物扱いされる」：負担となる対象→運搬するものとしての「荷物」

シネクドキー (提喩)：より一般的な意味をもつ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩。なお、より一般的な意味とは、相対的に外延が大きい (指示範囲が広い) ということであり、より特殊な意味とは、外延が小さい (指示範囲が狭い) ということである。

「(病院で) 石がたまっている」：結石・胆石→(岩石や鉱石などを含む) 石一般

「お茶でもしませんか」：飲み物一般→本来の「茶」

メトニミー (換喩)：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く

2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

「空間における隣接」：自転車を漕ぐ→「自転車」と「ペダル」

「時間上の隣接性」：料理に箸をつける→「食べ物に箸を接触させる」と「実際に食べる」

次に、4)の課題について、靱山(2020:132)は、3)をさらに発展させたものであるとし、「多義語の複数の意味の相互関係を明示することに加えて、個々の意味に共通する意味(スキーマ的意味)を抽出すること、個々の意味を構成要素として含むフレームを明示すること、多義構造全体における個々の意味の位置付けを示すこと等が課題となる」と述べている。本稿では、「送る」の多義構造を記述するにあたり、靱山(2021)が提案する「統合モデル」が有効であると考え、以下では、考察対象とする語の多義構造を明らかにする前提として、「統合モデル」について簡単に概観する。

靱山(2021:239-240)は、「統合モデル」について、以下のように説明している。

この統合モデルは、放射状ネットワークモデル⁽²⁾、スキーマティック・

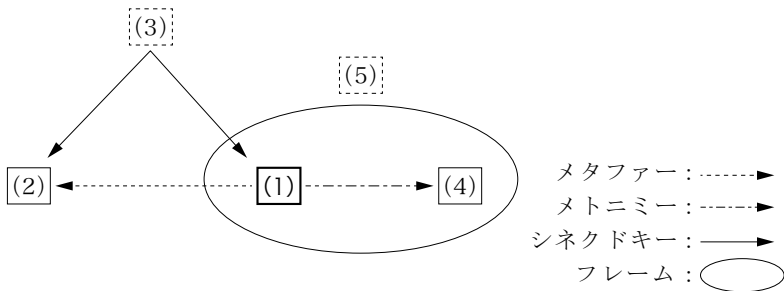


図1 統合モデル(靱山(2021:239))

ネットワークモデル、フレームに基づくモデル⁽³⁾を統合したものであり、3つのモデルの優れた点はそのまま継承し、さらにこれらを統合することによって、ある多義語の複数の意味すべてを包括的に記述・統合し、多義構造を明示することができるモデルである。(中略) 図1は、ある多義語(以下、Wとする)が以下のような性質を持つことを示している。なお、自立性が高い意味について確認すると、個々の母語話者において定着度が高く、かつ言語共同体において慣習性が高い意味のことである。

- 1) Wは(局所的スキーマ(3)およびフレーム(5)を含めて)(1)~(5)の5つの意味を持つ。
- 2) 意味(1)がWのプロトタイプの意味である。
- 3) 意味(2)は、意味(1)からメタファーに基づき拡張したものである。
- 4) 従って、意味(1)と意味(2)に共通する意味(スキーマ)として意味(3)が抽出できる。このことより、意味(3)と意味(1)および(2)はシネクドキーの関係である。
- 5) 意味(4)は、意味(1)からメトニミーに基づき拡張したものである。
- 6) 楕円は、意味(1)と意味(4)を構成要素とするフレーム(意味(5))である。

本稿では、以上の「統合モデル」に基づき、「生まれる」の多義構造を明らかにした上で、韓国語의 태어나다 [taeconada]⁽⁵⁾との対応関係について考察する。

3. 「生まれる」の意味分析

3.1. 分析の手順

本節では、以上の多義語分析の基本的な考え方と方法を踏まえて、「生まれる」の意味分析の手順について述べる。

【1】用例の収集

各コーパス、ウェブ検索エンジンなどを利用して様々なジャンルの用例を可能な限り多く収集し、使用頻度、使用領域、共起関係などを考慮してデータを整理する。

【2】多義語の分析

収集した用例に基づき、各語の意味用法を試行錯誤的かつボトムアップ的に検討し、先行研究の記述が不十分な（未着手の、あるいはアップデートが必要な意味用法がある）場合は、修正・追記する。最終的に、上述した多義語の分析の手法に基づき、各語の精緻な意味記述を行う。

【3】語の意味記述

語の意味特徴及び意味に関わる特性は〈 〉で括って示す。

【4】本稿で使用したコーパス及びウェブ検索エンジン

本稿で使用したコーパス及びウェブ検索エンジンについて提示する。なお、引用例は、以下のコーパス及びウェブ検索エンジンを参考にして作った作例である。

- 1) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)
- 2) Google (<http://www.google.co.jp/>)
- 3) 『NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)』 (<http://nlb.ninjal.ac.jp/>)
- 4) 『NINJAL-LWP for TWC (NLT)』 (<http://corpus.tsukuba.ac.jp/>)
- 5) Yahoo (<http://www.yahoo.co.jp/>)

以上の分析の手順に従い、「生まれる」の意味を分析した結果、以下のように下位分類することができた。

表1 「生まれる」の意味分類

意味分類		主な共起語
大分類	小分類	
生命の誕生		人間、赤ちゃん、娘、子、女の子、息子、孫、奇形児、障害児、子犬、子猫、牛、稚魚、生物、命、生命
立場・地位の獲得		人間、女、職人の子供、日本人、長男、霊能者、次男、皇子、一員、奴隸、嫡子、末っ子
人物・組織の出現		歴史的人物、ヒーロー、女性監督、億万長者、英雄、失業者、犠牲者、独裁者、難民、自衛隊、組合、国連
物の出現	商品・製品	商品、製品、品種、酒、ワイン
	場所・地域	店、空間、ハリウッド、地球、星、(都として)京都、古代ギリシャ
	創作物	名曲、傑作、名作、作品、音楽、映画、ドラマ
事柄の出現	関係	人間関係、絆、対立、交流、亀裂、対立、競争
	状況・事態	状況、変化、現象、ニーズ、需要、課題、問題、責任
	結果	格差、効果、結果、成果、利益、損失
	社会・文化	文化、社会、文明、風習、歴史、習慣
	言語・記録	表現、記録、会話、意味、伝説、新記録
	機会・時間	機会、チャンス、時間、余裕、選択肢、出会い
	技術・能力	技術、強さ、力、応用力、説得力
	制度・仕組み	制度、仕組み、産業、ビジネス、雇用、治療法
	学問	民俗学、社会学、心理学、理論、主義、理念、宗教
	活動	動き、活動、行動、発見
性向・特性	違い、メリット、多様性、客観性	
心的現象の出現	気持ち	安心感、不信任感、一体感、感情、疑問、団結心、自信、感覚、誤解、信頼、笑顔、感動、意欲、愛、笑い
	思考・知恵	仲間意識、集団意識、発想、思想、考え方、考え、工夫、知恵、アイデア、発想、価値観、世界観

以下では、以上の分類結果を踏まえて、多義語分析の方法に基づき、様々なレベルの意味の自立性（定着度）を有する「生まれる」について、スキーマ的意味・フレームを含めて、23の意味を認定し、考察を行う。

3.2. 「生まれる」の意味⁽⁶⁾

意味⁽⁷⁾ (1) 【生命の誕生】：〈人や動物の子が〉〈母体や卵から出て〉〈生の営みを始めるようになる〉

- (4) あの夫婦の間に、待望の女の子が生まれた。
- (5) うちの猫に、子猫が3匹生まれた。
- (6) 赤ちゃんが無事に産まれてほっとしたのも束の間、毎日の世話で明け暮れている。

意味1は、人や動物の子が、母体の胎内や卵から出てきて（または、卵から雛などがかえって）、個体としての生命活動を始めるようになることを表す。ただし、以下の例のように、生命といっても、動物の（体の）部位の出現や体に現れる現象、植物については使えない。

- (7) a × 歯【毛・尻尾】が生まれる（○生える）。
b × しわ【にきび】が生まれる（○できる）。
- (8) a × 草が生まれる（○生える）。
b × 種【実】が生まれる（○できる）。

意味1の統語上の特徴として、一般的に基本文型は「〈人・動物〉が〈人（のところ）・動物〉に生まれる」となるが、実際の使用場面においては、「～に～が」という語順の方が自然な場合が多い。⁽⁸⁾

- (9) a ? [子犬が] [うちの飼い犬に] 生まれた。
b ○ [うちの飼い犬に] [子犬が] 生まれた。

なお、漢字表記であるが、出産時やその直後の時点に注目して言う場合は「産」を使うことが多い。

意味 (2) 【立場・地位の獲得】：〈人が〉ある家柄・立場などの子として
 〈生の営みを始めるようになる〉

- (10) 彼は、北の果ての小さな村で、農民の子として生まれた。
 (11) 「日本人に生まれてよかったと感じる瞬間」についてアンケート調査を行った。
 (12) 1685年に音楽一家に生まれたバッハは、音楽の父と称されている。

意味1と意味2は、共に「人が生の営みを始めるようになる」ということを表す場合に用いられるが、意味1は「誕生」そのものに注目する場合に用いられるのに対して、意味2は（人が誕生すると同時に必然的に備わる）何らかの「立場・地位」に注目する場合に用いられる。つまり、この2つの意味は、時間上の隣接性（同時関係）が問題となっており、メトニミーによって意味拡張が成り立っていると考えられる。なお、これらの意味は下に示すように「人間の出生」というフレーム内に位置付けることができる。つまり、「誕生」というところ（構成要素）に注目する場合は意味1となり、「立場・地位」というところに注目する場合は意味2となる（焦点化の違い）。

意味 (3)：〈人が誕生し、（と同時に）何らかの立場・地位を獲得し、
 生の営みを始めるようになる〉

（意味1と意味2を構成要素とする「出生」のフレーム）

なお、「立場・地位」というのは、生まれつき獲得されるものに限られる（例 (13b)）。また、特徴的な「立場・地位」でない場合は使いにくい（例 (14b)）。

- (13) a ?彼は、弁護士として生まれた。
 b ○彼は、弁護士の息子として生まれた。

- (14) a ? 私は、赤ちゃんとして生まれた。
 b ○私は、日本最小の赤ちゃんとして生まれた。

意味 (4) 【人物・組織の出現】：〈それまで存在しなかった人物や組織が〉
 〈何かがきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (15) 日本のスポーツ界に、また一人、新たなヒーローが生まれた。
 (16) 現在も、世界のあちこちで難民が生まれ続けている。
 (17) 現在の国際連合が生まれたのは第二次世界大戦直後のことである。

意味 1 は、人が個体としての生命活動を始めるようになる、つまり、(生理学的)「出生」そのものを表すが、意味 4 は、それまで存在しなかった(価値・特徴を有する)人物や組織が、何かがきっかけ・基盤となって出現することを表す。ただし、いずれも「人が新たに出現する」という点では共通している。つまり、意味 4 は意味 1 からメタファーによって意味拡張が起きていると考えられる。

意味 (5) (スキーマ的意味)：〈人が〉〈新たに出現する〉(意味 1 と意味 4 のスキーマ)

なお、意味 4 における〈それまで存在しなかった人物〉というのは、何らかの価値・特徴を有することが前提となるため、特筆すべき場合でないといにくい(例 (18a))。また、〈何かがきっかけ・基盤となる〉ということから、単なる出現には使いにくい(例 (19a))。

- (18) a ? 中学生が生まれた。
 b ○スーパー中学生が生まれた。
 (19) a ? 友達が生まれる (○できる)。
 b ○喜びや悔しさなど様々な経験を共有することで、真の友達が

生まれる。

意味 (6) 【物の出現】(スキーマ的意味) : 〈それまで存在しなかったものが〉〈何かがかぎっかけ・基盤となって〉〈出現する〉(意味6-1～意味6-3のスキーマ)

意味4は、それまで存在しなかった人物や組織が、新たに出現することを表すが、意味6はそれまで存在しなかった物が、新たに出現することを表す。なお、この意味6は、〈商品・製品〉〈場所・地域〉〈創作物〉というように、大きく3つの意味に下位分類できる。以下、具体例を示しておく。

意味 (6-1) 【商品・製品】 : 〈それまで存在しなかった商品・製品が〉〈何かがかぎっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

(20) この医薬品は、産学共同研究から生まれたものである。

(21) こちらの製品は、女性のお客様の強い要望で生まれたものです。

意味 (6-2) 【場所・地域】 : 〈それまで存在しなかった場所・地域が〉〈何かがかぎっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

(22) 生まれたばかりの星のことを、「原始星」と言う。

(23) 約6000年前に、メソポタミアに最初の都市が生まれたと言われている。

意味 (6-3) 【創作物】 : 〈それまで存在しなかった創作物が〉〈何かがかぎっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

(24) このアルバムには、昭和の時代に生まれた名曲の数々が収録されています。

(25) 文豪が愛し、数々の名作が生まれた温泉宿を巡る。

なお、「コンビニ」のような一般的なもの（建物）でも、それまで当該の地域・範囲に存在しなかったものであれば、使うことができる（例（26b））。また、単なる生産（量産）には使いにくい（例（27））。

(26) a ?家の隣に、コンビニが生まれた（○できた）。

b ○日本にコンビニが生まれたのは、1970年代だそうさ。

(27) ?この食品工場では、1日5千個の弁当が生まれて（○生産されて【作られて】）いる。

ところで、意味6は意味4からメタファーによって意味拡張していると考えられる。つまり、両者からは〈ある対象が新たに出現する〉という共通の意味を抽出できるということである。なお、意味4と意味6の相違点は、生まれる対象が〈人〉か〈物〉かという点である。

意味（7）（スキーマ的意味）：〈ある対象が〉〈新たに出現する〉（意味4と意味6のスキーマ）

意味（8）【事柄の出現】（スキーマ的意味）：〈それまで存在しなかった事柄が〉〈何かがかきかけ・基盤となって〉〈出現する〉（意味8-1～意味8-11のスキーマ）

意味6は、それまで存在しなかったもの（具体物）が、新たに出現することを表すが、意味8はそれまで存在しなかった事柄（抽象物）が、新たに生じることを表す。なお、この意味8は、〈関係〉〈状況・事態〉〈結果〉〈社会・文化〉〈言語・記録〉〈機会・時間〉〈技術・能力〉〈制度・仕組み〉〈学問〉〈活動〉〈性向・特性〉というように、大きく11の意味に下位分類できる。以下、具体例を示しておく。

意味 (8-1) 【関係】：〈それまで存在しなかった関係が〉〈何かがきっかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

- (28) 日頃から、チームのメンバーと密にコミュニケーションを図ること
で、信頼関係が生まれる。
- (29) 会社が成長し従業員が増えてくると、労使間あるいは従業員間で
意見の衝突や対立が生まれることもある。

意味 (8-2) 【状況・事態】：〈それまで存在しなかった状況・事態が〉〈何
かがきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (30) 新型コロナウイルスの大流行でワークスタイルや教育に大きな変
化が生まれた。
- (31) 家事労働を外部委託できる仕組みを作れば、経済に新たな需要が
生まれることは十分期待できる。

意味 (8-3) 【結果】：〈それまで存在しなかった結果が〉〈何かがきっかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

- (32) 親の経済力の違いにより、子どもの教育にも格差が生まれてしま
っている。
- (33) お互いの事業を組み合わせると相乗効果が生まれる可能性が高く
なる。

意味 (8-4) 【社会・文化】：〈それまで存在しなかった社会・文化が〉〈何
かがきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (34) 人と人が触れ合うところに新しい文化が生まれる。
- (35) 科学技術の進歩によって人間の新しい生活習慣が生まれる。

意味 (8-5) 【言語・記録】：〈それまで存在しなかった言語・記録が〉〈何がきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (36) 男子の砲丸投げで世界新記録が生まれた。
- (37) インターネットの発達によって、次々と新しいコミュニケーションが生まれている。

意味 (8-6) 【機会・時間】：〈それまで存在しなかった機会・時間が〉〈何がきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (38) 家事を効率化させると自由な時間が生まれるだけでなく、心にも余裕ができる。
- (39) 読書を通して新しい出会いが生まれる。
- (40) 行政のデジタル化によって、新たなビジネスチャンスが生まれる。

意味 (8-7) 【技術・能力】：〈それまで存在しなかった技術・能力が〉〈何がきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (41) 名古屋大学との共同研究で生まれた特許技術を用いて、ついに商品化に成功しました。
- (42) 基礎を固めることによって真の学力が身に付き、応用力が生まれる。

意味 (8-8) 【制度・仕組み】：〈それまで存在しなかった制度・仕組みが〉〈何がきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (43) グローバル化の影響で、製造業が海外に拠点を移してしまい、国内で新規の雇用が生まれにくくなっている。
- (44) 情報技術の進展に伴い、有益な情報と人を結びつけることによって、産業界では次々と新たなビジネスが生まれている。
- (45) この研究を通して、認知症の新たな治療法が生まれることが期待される。

意味 (8-9) 【学問】：〈それまで存在しなかった学問が〉〈何かがかきかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

(46) 相対性理論が生まれる前は、ニュートンの絶対時間が常識とされていた。

(47) 本講義では、日本に民俗学が生まれた経緯について論じる。

意味 (8-10) 【活動】：〈それまで存在しなかった活動が〉〈何かがかきかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

(48) この度新しい国際ボランティア組織が発足し、多様な民間活動が生まれることが期待される。

(49) 日常生活の素朴な疑問から新しい発見が生まれる。

意味 (8-11) 【性向・特性】：〈それまで存在しなかった性向・特性が〉〈何かがかきかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

(50) 様々な国の人々との関わりや触れ合いから多様性が生まれます。

(51) 年齢によって、働くことに対する意識の違いが生まれる理由について考察する。

ところで、意味 8 は意味 6 からメタファーによって意味拡張していると考えられる。つまり、両者からは〈ある対象が新たに出現する〉という共通の意味を抽出できるということである（スキーマ的意味・意味 (7)）。なお、意味 6 と意味 8 の相違点は、生まれる対象が〈具体物〉か〈抽象物〉かという点である。なお、この意味 8 は、何かがかきかけ・基盤となって生じる場合に使用されることから、単なる出現には使いにくい（例 (52a)）。また、新たに生じる場合に用いられることから、日常的に繰り返し起こる出来事には使いにくい（例 (53a)）。

- (52) a ?急用が生まれた (○できた)。
 b ○観光開発によって、新たな雇用が生まれた。
- (53) a ×家の前の交差点で、また交通事故が生まれた (○起きた)。
 b ○自動運転システムの導入によって、新しい種類の交通事故が生まれることが予想されている。

意味 (9) 【心的現象の出現】(スキーマ的意味) : 〈心的現象が〉〈人の心に〉〈出現する〉(意味9-1~意味9-2のスキーマ)

意味8は、それまで存在しなかった事柄が、世の中(社会)に新たに出現することを表すが、意味9は人間の心的現象が心の中に出現することを表している。なお、この意味9は、〈気持ち〉〈思考・知恵〉というように、大きく2つの意味に下位分類できる。以下、具体例を示しておく。

意味 (9-1) 【気持ち】 : 〈気持ちが〉〈人の心に〉〈出現する〉

- (54) 子育てが一段落したことで、日々の生活に少しずつ余裕が生まれてきました。
- (55) この慈善活動を通じて、貧困に苦しんでいる多くの子供たちに笑顔が生まれることを願っている。
- (56) ここまで立て続けに不祥事が起きると、国民に不満や不信感が生まれても不思議ではない。

意味 (9-2) 【思考・知恵】 : 〈思考・知恵が〉〈人の心に〉〈出現する〉

- (57) 業務体制を見直したことで、現場に様々な知恵や工夫が生まれています。
- (58) 発想力や想像力は、様々な体験を積み重ねることによって生まれてくる。

(59) このアイデアは、東日本大震災の辛い経験から生まれたものである。

ところで、意味9は意味8からメタファーによって意味拡張していると考えられる。つまり、両者からは〈ある対象が新たに出現する〉という共通の意味を抽出できるということである（スキーマ的意味・意味(7)）。なお、意味9の統語上の特徴として、一般的に基本文型は「〈心情・考え〉が〈人（の心）〉に生まれる」となるが、実際の使用場面においては、「～に～が」という語順の方が自然な場合が多い（例（60b））。また、心的現象の発生は、具体的な日時を表す言葉とは共起しにくい（例（61a））。

(60) a ? [不満や不信感が] [国民に] 生まれた。

b ○ [国民に] [不満や不信感が] 生まれた。

(61) a ? 10月5日に、夫に対して不信感が生まれた。

b ○私が妊娠した時から、夫に対して不信感が生まれた。

3.3. 多義構造

以上、様々なレベルの意味の自立性（定着度）を有する「生まれる」について、スキーマ的意味・フレームを含めて、23の意味を認定し、分析を行った。また、複数の意味間の関連性については比喩の観点から説明した。

表2 「生まれる」の意味（多義的別儀）

意味(1)：〈人や動物の子が〉〈母体や卵から出て〉〈生の営みを始めるようになる〉
意味(2)：〈人が〉〈ある家柄・立場などの子として〉〈生の営みを始めるようになる〉
意味(3)：〈人が誕生し、（と同時に）何らかの立場・地位を獲得し、生の営みを始めるようになる〉（意味1と意味2を構成要素とする「出生」のフレーム）
意味(4)：〈それまで存在しなかった人物や組織が〉〈何かがきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

意味 (5) (スキーマの意味) : 〈人が〉〈新たに出現する〉 (意味1と意味4のスキーマ)
意味 (6) (スキーマの意味) : 〈それまで存在しなかったものが〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 (意味6-1～意味6-3のスキーマ) 意味 (6-1) : 〈それまで存在しなかった商品・製品が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (6-2) : 〈それまで存在しなかった場所・地域が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (6-3) : 〈それまで存在しなかった創作物が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉
意味 (7) (スキーマの意味) : 〈ある対象が〉〈新たに出現する〉 (意味4と意味6のスキーマ)
意味 (8) (スキーマの意味) : 〈それまで存在しなかった事柄が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 (意味8-1～意味8-11のスキーマ) 意味 (8-1) : 〈それまで存在しなかった関係が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-2) : 〈それまで存在しなかった状況・事態が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-3) : 〈それまで存在しなかった結果が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-4) : 〈それまで存在しなかった社会・文化が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-5) : 〈それまで存在しなかった言語・記録が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-6) : 〈それまで存在しなかった機会・時間が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-7) : 〈それまで存在しなかった技術・能力が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-8) : 〈それまで存在しなかった制度・仕組みが〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-9) : 〈それまで存在しなかった学問が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-10) : 〈それまで存在しなかった活動が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-11) : 〈それまで存在しなかった性向・特性が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉
意味 (9) (スキーマの意味) : 〈心的現象が〉〈人の心に〉〈出現する〉 (意味9-1～意味9-2のスキーマ) 意味 (9-1) : 〈気持ち〉〈人の心に〉〈出現する〉 意味 (9-2) : 〈思考・知恵〉〈人の心に〉〈出現する〉

以上の分析結果に基づくと、「生まれる」の多義構造は次のように示すことができる。

以下、図2の「生まれる」の多義構造の表記について、簡略に説明をする。

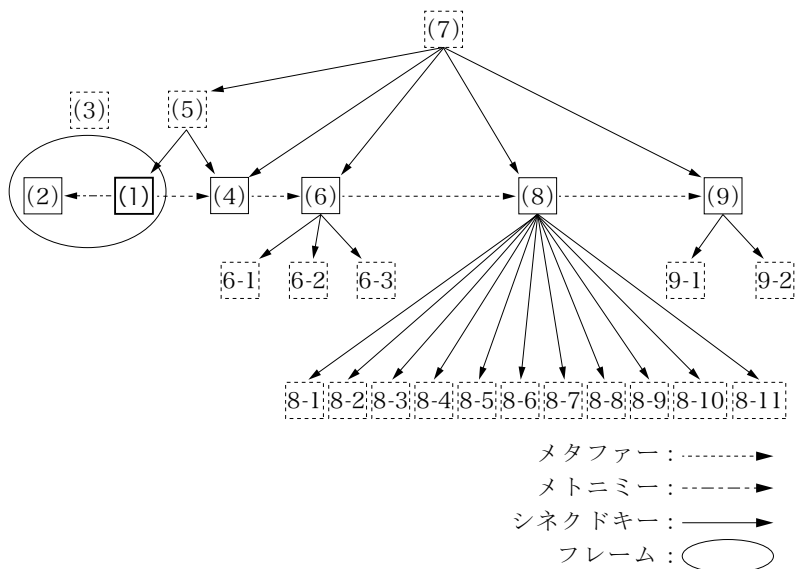


図2 「生まれる」の多義構造

- (a) 「生まれる」はスキーマ的意味(意味5、6、7、8、9)・フレーム(意味3)を含めて、23の意味を持つ。
- (b) 「生まれる」のプロトタイプ的意味は、意味1となる。
- (c) 楕円で囲まれた意味1と意味2はメトニミーの関係にあり、意味3は意味1と意味2を構成要素とするフレームとなる。
- (d) 意味1と意味4はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味として意味5を抽出することができる。
- (e) 意味4と意味6はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味として意味7を抽出することができる。
- (f) 意味6と意味6-1～6-3はシネクドキーの関係にある。
- (g) 意味6と意味8はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味として意味7を抽出することができる。
- (h) 意味8と意味8-1～8-11はシネクドキーの関係にある。

- (i) 意味 8 と意味 9 はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味として意味 7 を抽出することができる。
- (j) 意味 9 と意味 9-1 及び意味 9-2 はシネクドキーの関係にある。
- (k) 意味 7 と意味 5 はシネクドキーの関係にある。つまり、意味 7 は、意味 5 よりさらに高次のスキーマ（スーパースキーマ）であるということになる。
- (l) 各意味の自立性（定着度）について、最も自立性の高い意味 1 は、太線の実線の四角で囲って示される。また、意味 2、4、6、8、9 は相当程度の自立性を有しており、実線の四角で囲って示される。さらに、意味 3、5、6-1～6-3、7、8-1～8-11、9-1、9-2 の自立性は相対的に劣っており、点線の四角で囲って示される。

4. 「生まれる」と태어나다 [taeonada] の対応関係について

本節では、日本語の動詞「生まれる」に関する以上の分析結果に基づき、韓国語の태어나다 [taeonada] との意味の対応関係について検討する。

以上の分析結果から分かるように、「生まれる」は多様な意味を持つ多義語であり、その意味拡張の様相も複雑である。しかし、後述するように、一般的に「生まれる」に対応するとされる韓国語の태어나다 [taeonada] は、意味拡張がほとんど進んでおらず、基本的な意味に限定して用いられていることが分かる。その要因として、韓国語の場合は、「生命の誕生や物事の出現」という事態に対して、下に示すように태어나다 [taeonada] のみならず様々な関連語（類義語）を用いて表しているという点があげられる。一方、日本語の場合は、（日本語にも）様々な関連語があるにも拘わらず、「生まれる」が広範囲の事象を表すこと

ができることは、特筆すべき点である。

- ・ 태어나다 [taeonada] 和訳：生まれる
- ・ 출생하다 [chulsaenghada] 和訳：出生する
- ・ 탄생하다 [tansaenghada] 和訳：誕生する
- ・ 발생하다 [balsaenghada] 和訳：発生する
- ・ 생기다 [saenggida]／생겨나다 [saenggyeonada] 和訳：生じる・できる／生じ出る
- ・ 나오다 [naoda] 和訳：出てくる

以下では、日本語の「生まれる」に対して、韓国語の태어나다[taeonada]と上記の関連語がどのような対応関係にあるかを検討する。

表3 「生まれる」と태어나다 [taeonada] の対応関係

「生まれる」の意味		主な共起語	태어나다	関連語
大分類	小分類			
生命の誕生		人間、赤ちゃん、娘、子、女の子、息子、孫、奇形児、障害児、子犬、子猫、牛、稚魚、生物、命、生命	○	출생하다 탄생하다
立場・地位の獲得		女、職人の子供、日本人、長男、霊能者、次男、皇子、一員、奴隷、嫡子、末っ子	○	출생하다
人物・組織の出現		歴史的人物、ヒーロー、女性監督、億万長者、英雄、失業者、犠牲者、独裁者、難民、自衛隊、組合、国連	⁽⁹⁾ △	탄생하다 발생하다 나오다
物の出現	商品・製品	商品、製品、品種、酒、ワイン	×	탄생하다 나오다
	場所・地域	店、空間、ハリウッド、地球、星、(都として) 京都、古代ギリシャ	×	생기다/ 생겨나다 탄생하다
	創作物	名曲、傑作、名作、作品、音楽、映画、ドラマ	×	탄생하다 나오다

事柄の出現	関係	人間関係、絆、対立、交流、亀裂、対立、競争	×	생기다 / 생겨나다
	状況・事態	状況、変化、現象、ニーズ、需要、課題、問題、責任	×	생기다 / 생겨나다 발생하다
	結果	格差、効果、結果、成果、利益、損失	×	생기다 / 생겨나다 발생하다 나오다
	社会・文化	文化、社会、文明、風習、歴史、習慣	×	탄생하다 ⁽⁰⁰⁾ 생기다 / 생겨나다
	言語・記録	表現、記録、会話、意味、伝説、新記録	×	생기다 / 생겨나다 탄생하다 나오다
	機会・時間	機会、チャンス、時間、余裕、選択肢、出会い	×	생기다 / 생겨나다
	技術・能力	技術、強さ、力、応用力、説得力	×	탄생하다 생기다 / 생겨나다 나오다
	制度・仕組み	制度、仕組み、産業、ビジネス、雇用、治療法	×	탄생하다 생기다 / 생겨나다 나오다
	学問	民俗学、社会学、心理学、理論、主義、理念、宗教	×	탄생하다 생기다 / 생겨나다
	活動	動き、活動、行動、発見	×	생기다 / 생겨나다
心的現象の出現	性向・特性	違い、メリット、多様性、客観性	×	생기다 / 생겨나다 나오다
	気持ち	安心感、不信心、一体感、感情、疑問、団結心、自信、感覚、誤解、信頼、笑顔、感動、意欲、愛、笑い	×	생기다 / 생겨나다
	思考・知恵	仲間意識、集団意識、発想、思想、考え方、考え、工夫、知恵、アイデア、発想、価値観、世界観	×	생기다 / 생겨나다 나오다

表3から分かるように、日本語の「生まれる」は生命(有情物)の誕生に留まらず、様々な物事の出現や心的現象といった抽象的な事柄につ

いても用いられるのに対して、韓国語의 태어나다 [taeconada] は、基本的に生命の誕生、人物や組織の出現といった意味（「生まれる」の意味 1, 2, 4 に限定して用いられ、その他の意味に関しては、関連語（類義語）で代用されていることが分かる。その要因については現時点では不明であるが、今後関連語の意味用法の分析も含めてさらに詳細に検討する必要がある。

5. まとめ

以上、本稿では動詞「生まれる」が持つ複数の意味を記述し、それら複数の意味の関連性について考察した。その結果、「生まれる」についてスキーマ的意味・フレームを含めて、23の意味を認定することができた。また、意味間の関連性については、比喩の観点から考察を行い、その詳細を明らかにした。

また、以上の分析結果に基づき、韓国語의 태어나다 [taeconada] との意味の対応関係について検討した。その結果、日本語の「生まれる」は多様な意味を持つ多義語であり、その意味拡張の様相も複雑であるが、この「生まれる」に対応する韓国語의 태어나다 [taeconada] は、意味拡張がほとんど進んでおらず、基本的な意味に限定して用いられていることが分かった。その要因として、韓国語の場合は、「生命の誕生や物事の出現」といった事態に対して、様々な関連語（類義語）で代用しているという点があげられる。

参考文献

李澤熊 (2020) 『日本語の意味研究の新たな扉を開く—意味分析の方法と実

- 際一』、開拓社。
- 李澤熊 (2023) 『現代日本語における意図性副詞の意味研究—認知意味論の観点から—』、ひつじ書房。
- 北原保雄 (2011) 『明鏡国語辞典』第3版、大修館書店。
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』、大修館書店。
- 朱信源 (編) (2005) 『標準韓国語辞典』、白帝社。
- 新村出 (編) (2008) 『広辞苑』第6版、岩波書店。
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」、楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』、pp. 31-61、ひつじ書房。
- 松村明 (監) (2012) 『大辞泉』第2版、小学館。
- 松本曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」、澤田治美 (編) 『語・文と文法カテゴリーの意味』(ひつじ意味論講座1)、pp. 23-43、ひつじ書房。
- 民衆書林編集局 (編) (1998) 『日韓・韓日辞典』、民衆書林。
- 靱山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」、『認知言語学論考』No. 1、pp. 29-58、ひつじ書房。
- 靱山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る)、研究社出版。
- 靱山洋介 (2010) 『認知言語学入門』、研究社出版。
- 靱山洋介 (2016) 「多義語の多様性：典型的な多義語と単義語寄りの多義語」、『日本認知言語学会論文集』第16巻、pp. 512-517、日本認知言語学会。
- 靱山洋介 (2019) 「多義語分析の課題と方法」、プラシャント・バルデシ・靱山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也 (編) 『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』、pp. 32-50、開拓社。
- 靱山洋介 (2020) 『実例で学ぶ 認知意味論』、研究社。
- 靱山洋介 (2021) 『[例解] 日本語の多義語研究—認知言語学の観点から—』、大修館書店。
- 靱山洋介・深田智 (2003) 「第3章 意味の拡張」、松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻)、pp. 73-134、大修館書店。
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』、角川書店。
- 森山新 (編著) (2012) 『日本語多義語学習辞典 動詞編』、アルク。
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 (編) (2012) 『新明解国語辞典』第7版、三省堂。
- Evans, V. and M. Green (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fillmore, C. J. (2003) “Topics in Lexical Semantics.” In *Form and Meaning in*

- Language*. pp. 201–260. Stanford: CSLI Publications.
- Fillmore, C. J. and C. Baker (2010) “A Frames Approach to Semantic Analysis.” In Heine, B. and H. Narrog (eds.) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*. Oxford: Oxford University Press. pp. 313–339.
- Geeraerts, D. (2010) *Theories of Lexical Semantics*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論』、紀伊国屋書店.)
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol. 1). *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明監訳 (2011) 『認知文法論序説』、研究社出版.)
- Tuggy, D. (1993) “Ambiguity, Polysemy, and Vagueness.” In *Cognitive linguistics* 4 (3). pp. 273–290.

注

- (1) Tuggy(1993)にも同様の趣旨の主張が見られ、ambiguity (両義性：同音異義語)、polysemy (多義性：多義語)、vagueness (漠然性：単義語)の連続性を指摘している。つまり、一方の端は同音異義語、他方の端は単義語が占め、その中間に、意味の定着度の度合いが異なる多様な多義語が段階的に存在するという立場をとっている。
- (2) Lakoff(1987)、Evans and Green(2006)、Geeraerts (2010)、瀬戸 (2007)などを参照されたい。
- (3) Langacker (1987, 1990, 1999, 2008)などを参照されたい。
- (4) Fillmore (2003)、Evans and Green (2006)、Fillmore and Baker (2010)、松本 (2010)などを参照されたい。
- (5) 意味分析の方法に関する詳細は、李 (2020, 2023)も参照されたい。
- (6) 本節は、『国立国語研究所基本動詞用法ハンドブック (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp>): 辞典』において、筆者が担当した「生まれる」に修正・加筆

したものである。

- (7) 本稿では、意味1を「生まれる」のプロトタイプの意味として考える。コーパス検索システム(NLT)を使って、「名詞が生まれる」という共起関係を調べたところ、上位13位すべてが意味1として用いられるものであった。このように、「頻度」という観点から見た場合、意味1をプロトタイプの意味として考えるのは妥当であろう。なお、プロトタイプの意味の認定の問題をめぐっては、様々な観点から考察がなされているが、一般的にプロトタイプの意味は、拡張した意味を理解する上での前提となり、具体性が高い、母語話者の頭の中で認知・想起されやすい、用法上の制約を受けにくいといった特徴を持つ(瀬戸(2007)、初山(2021)など)。
- (8) 格助詞「に」は、〈所有〉や〈能力〉の意味用法を表す場合、「～に～が」という語順になる傾向がある。〈所有〉:[私に][妹が]いる(生まれる)。〈能力〉:[彼に][ゴルフが]できる。
- (9) 태어나다 [taeconada]は「歴史的人物、ヒーロー、女性監督、億万長者、英雄」のような語とは共起するが、「失業者、犠牲者、難民、自衛隊、組合、国連」のような語とは共起しにくい。
- (10) 탄생하다 [tansaenghada]は「習慣」など、一部の語とは共起しにくい場合もある。